「読点の打ち方」の指導ポイント

Teaching Points for “How to use commas”

公益財団法人日本漢字能力検定協会　現代語研究室長

佐竹　秀雄

国立国語研究所室長、武庫川女子大学言語文化研究所長（同文学部教授）を経て現職。武庫川女子大学名誉教授、日本広報協会広報アドバイザー。編著書に『デイリーコンサイス国語辞典』『サタケさんの日本語教室』『文章を書く技術』など。

shinjin.sat@gmail.com　TEL 0798-68-4531

1 執筆の動機と目的

この３年、筆者は本誌「Japio YEAR BOOK」で、実社会における敬語指導上の課題について論述してきた。その過程で、インターネットの中に、企業に勤める人向けに敬語を指南するサイトが存在することを知った。さらに、その種のサイトでは、敬語以外の文章作成上の問題についても扱っていることを知った。今回は、その中の文章表記における読点に関するものを取り上げる。

句読点という言葉があるように、読点は句点とセットとして扱われることが多い。句点には「文末に打つ」という大原則がある。文を書けば必ず文末が生じるので、句点を文末に打つことがルールだと言われると、それなりに納得がいく。

それに対して、読点に関してはルールと呼べる明確なものは存在しない。読点のない文は存在しうるし、句点における「文末」のような、常に発生し、その場所に打つのがよいと言い切れるものはない。読点に関しては、いつもではなく、「こういう場合には打つのがよい」と条件つきで勧められる打ち方でしかない。

そのような読点に関して、ネットの指南サイトが、タイトルに「読点の打ち方のルール」のような表現をするものが多いことに、まず違和感を覚えた。このことは、読点の本質を理解せずに、いい加減な説明を加えている可能性が高い。

そこで、「読点の打ち方」を指南しているサイトに書かれている内容を整理分析して、そこから得られた読点指導の課題を報告し、考察を加える。

2 対象とする資料の概要

本論で、資料となる読点に関する指南サイト（以下、「読点指南サイト」と呼ぶ）として取り上げるのは、企業などで文章を書く必要のある人に向けて、読点の打ち方についての注意や指導を行う趣旨のサイトだと判断されるものである。読点に関する研究や学校教育向けの指導が目的のサイトは除いている。実際には「読点の打ち方」をキーワードとしてネット検索した結果、上位に並んだものから、上の条件に合うものを 10 件採取した。

10 件のサイトのほとんどでは、句点とまとめて説明していた。本論では、そのうちの読点に関するところだけに注目する。また、10 件のサイトでは、いずれも、読点を打つべき場所ないし場合を箇条書きで掲げて、それぞれに対して説明を加えている。10 件中 9 件のサイトでは、その箇条書きのそれぞれをルールと呼んでいた。残る 1 件の「参照サイト F」のみが、ルールではなく「読点を打つタイミング」と称していた。なお、本論で「参照サイト X」と示すときの X は、本文最後の「参照ウェブサイト」の記号と一致させている。

まず、今回参照した読点指南サイトでは、句点のルールなるものをどのように説明しているかを示す。そのために、サンプルとして 2 つのサイトからそれぞれの一部を以下に引用する。

◆サンプル 1［参照サイト B］

読点「、」ルール

ルール 1　主語の後に打つ。

例：当社は、今期社員増の予定です。

例：私は、彼に感謝した。

ルール２　文と文を分けるところに打つ。

例：佐藤部長は今月分の売り上げ見込み数字を伝え、木下課長は今月の受注数字を伝えた。［以下略］

◆サンプル２［参照サイトD］

読点のルール

読点は、句点に比べて間違った使い方をしている人も多いです。

少なすぎても多すぎても読みにくい文章になってしまうので、先ほどもご紹介した20～30文字を目安に読点を打ちましょう。具体的には次のような場合に打ってください。

主語の区切り

主語が長い場合、どこまでが主語か明確にするために主語の後に読点を打ちます。

例：地区大会を第１位で通過した〇〇は、全国大会３位だった。

漢字、ひらがなの連続

漢字・ひらがなが連続する場合、読みやすくするために読点を打ちます。

例：春の七草は「せり、なずな、ごぎょう、はこべら、ほとけのざ、すずな、すずしろ」だ。

［以下略］

このように、読点を打つルールと称する項目を箇条書きにして掲げ、例文を挙げている。そして、サイトによっては、その項目について説明を加えている。

3　読点指南サイトの特徴

3.1　「読点を打つ項目」の多少と認知度

10件の読点指南サイトを比較して、気になることは、読点を打つ場所である項目の挙げ方とその説明の表現である。

まず、項目の挙げ方であるが、サイトによってかなり違っている。項目の数からして異なる。少ないサイトは5項目、最も多いサイトは12項目であった。もちろん、分類の仕方や説明の都合が考えられるので、すべて一致することは考えられないが、内容から見ても、あまりにも違いすぎる。このことは、読点の打ち方のポイントとして、一般に共通した考え方が存在していないことの証とも考えられそうである。

それはともかく、サイトによって項目数が異なるということは、項目の側から見れば、多くのサイトに取り上げられている項目と、数少ないサイトにしか取り上げられていない項目があるということである。

多くのサイトに取り上げられていることは、それだけ、読点を打つ場所として広く認知されている可能性が高い。では、どのような項目が、多くのサイトに取り上げられていたのか。言い換えれば、読点を打つ場所としての認知度の高い項目とは何か。また、そこでは、どのような表現で説明されていたのか。

3.2　「読点を打つ場所」の説明の現状

「読点を打つ場所」として、より多くのサイトで取り上げられたものを並べると、次のようになった（上位８項目）。

表　「読点を打つ場所」の多かったもの

１位	10サイト	主語の後
２位	９サイト	並列する語句の後
２位	９サイト	修飾先を明確にするためのもの
４位	７サイト	連続する漢字やひらがなの切れ目
４位	７サイト	接続詞の後
６位	５サイト	接続助詞の後
７位	４サイト	重文の途中
７位	４サイト	条件句の後

細かい違いはあるが、「主語の後に打つ」という趣旨のものが、10サイトのすべてで認められた。ただし、その表現は「主語の後に打つ」「主語の区切り」「長い主語の後に読点を打つ」などさまざまであった。

その10サイトのうち、2サイトでは単に「主語の後」であったが、他の８件は「長い」という条件が加わっていた。現実に、主語が短い場合は読点を打たないから、条件「長い」は必要なはずである。しかし、「長い」を決めるものさしについて言及はない。結局、読点を打つルールと称しておきながら、主語に関して、どのような長さのときに、その主語の後に読点を打つべきかの基準を明確に示せてはいない。

また、「主語の後」を取り上げるときに、「長い主語・目的語・述語の後」と「述語」を加えた述べ方をしているものが２つあった。しかし、普通、述語の後には句点

が打たれるはずなので、この趣旨は不明である。いいかげんなサイトから、いわゆるコピペした結果かもしれないが、きちんと考えて書いているとは思えない。

２番目に多かったものは２つあった。その１つが「並列する語句の後」を示すものであった。これは

⑴ サル、タヌキ、キツネのぬいぐるみ。

⑵ 赤い、小さな、かわいい花が咲いた。

などにおける読点を指すものである。

ただし、その並列する語句を示すのに「名詞が連続しているとき」「名詞を並列で書くとき」などと名詞に限定するものが４件あり、そのうち１件は「連続する固有名詞」としていた。

上述の「赤い、小さな、かわいい花」の例でわかるように、並列するものは名詞に限らない。名詞に限定したのは、勝手な思い込みのせいか、こちらも、いわゆるコピペのせいかはわからないが、かなりずさんな記述である。執筆者の言語能力が疑われる。

２番目に多かったもう１つは、「修飾先を明確にするためのもの」である。例えば、

⑶ 部下は急いで、外出する上司のためにタクシーを呼んだ。

⑷ 大きな、丸太の橋がかかっている。

のような場合の読点である。読点を打たないと、意味にあいまいさが生じる。読点を打つことによって、その直前の語句が、直後の語句ではなく、より後方の語句を修飾することになる。この読点によって、修飾先が限定されて意味のあいまいさが減じられる。

これに関しては、各サイトで説明の仕方はさまざまであったが、いずれも意味が誤解されないようにするためという立場からの指摘であった。この読点が打たれるパターンは多岐にわたるので、きちんと説明するのはかなり面倒である。その点、各サイトの説明は十分とは言えないまでも、理解のできるものであった。ただ、次のように間違った説明がされているものもあった。

ルール４　修飾語がどこにかかるか、わかるところに打つ。

例：１万円の時計のベルトを選んだ。

↓

１万円の時計の、ベルトを選んだ。←「１万円の時計」が「ベルト」を修飾

１万円の、時計のベルトを選んだ。←「１万円の」が「ベルト」を修飾　（参照サイトＢ）

ここでは、修飾関係があいまいな文を読点で区別できることを説明している。ただ、前者の「１万円の時計」が「ベルト」を修飾する場合には、「１万円の時計のベルトを選んだ。」と書き、この説明のように「１万円の時計の、ベルトを選んだ。」とは書かない。読点を打つことは、原則として、直後の語句を修飾しないサインであるからだ（くわしくは後述する）。こちらは、執筆者の言語センスが疑われる。

４番目に多かったものにも２つの場合があった。

１つは「ひらがなや漢字が連続して、読みにくかったり誤読が生じたりする可能性のあるところ」である。

⑸ ももも、すももも、もものうち。

⑹ 二重にして、くびに巻く数珠。

二重にし、てくびに巻く数珠。

これについては、読点を打つ理由として、ほとんどのサイトが読みやすくするため、誤読をさけるためと述べていた。これは、それなりに妥当な説明と言えよう。

４番目に多かった２つめは「接続詞の後」である。これは比較的よく知られていると思われる。文頭の「しかし」「だから」などの後に打たれるものである。

ちなみに、「接続詞の後」に言及している７サイトのうち、あるサイトでは「接続詞・接続助詞の後」とまとめて述べていた。ただし、そこでは、

接続詞・接続助詞のあと

接続詞や接続助詞の後には、しばしば読点を置くことが推奨されます。これは、前後の文の関連性や流れを明確にするルールです。

例えば、「しかし、その計画は成功しなかった」や「だから、彼はその道を選んだ」のように、接続詞や接続助詞の後に読点を打つことで、文脈の変化や進行を明示できます。

（参照サイトＩ）

とあった。説明の中には、接続詞だけで接続助詞が出てこない。接続詞と接続助詞の区別がつかないのかもしれない。

また、同じく、接続詞を挙げた７サイトのうち、２サイトでは、「接続詞」というだけでなく、なぜか「逆接」

に限定している。言葉通りにとれば、順接の接続詞のときは、読点不要ということになる。具体的には、次のように説明している。

読点ルール５　接続詞の逆接のあとに「、」を打つ

接続詞の逆接のあとには、読点を打つようにします。

【×悪い例】私は毎年宝くじを、買っているが一度も当たったことがない。

【○良い例】私は毎年宝くじを買っているが、一度も当たったことがない。

前と後ろの文をつなぐのが接続詞であり、だから･また･が・しかし・そしてなどの種類があります。

「逆接」とは、前の文章と逆の意味の文章をつなぐ接続詞のことです。　（参照サイトＡ）

「買っているが」の「が」は接続詞ではなく、接続助詞である。どうやら、ここでも、接続詞と接続助詞の区別が理解できていないようである。言語に関する基礎知識のお粗末さが認められる。

これに関連して、もう１つ、逆接が強調されているものがあった。実質的には、接続詞ではなく接続助詞を取り上げているのだが、次のように書かれている。

逆説の関係

文章で逆説の関係を述べる際、より関係性を明確にするため読点を打ちます。

例：家電のリサイクルには料金がかかりますが、当店でお買い上げいただいた方は無料です。

（参照サイトＤ）

逆接が特別に取り上げられているのは、逆接は順接と違って対比が強い印象があり、その違いを際立たせるためではないかと推測される。なお、「逆接」とすべきところが「逆説」とあるのは原文のママである。

７位以下は、サイト数が４以下なので、全体の半分未満の掲載しかなかったものである。７位の「重文の途中」というのは、

⑺ 空には太陽が昇り、今日も１日が始まった。

のように、２文として独立しうる部分をつなぐものである。これも、多くの人は無意識に読点を打つ箇所と言えよう。

７位の２つめは「条件句の後」だが、例を挙げれば

⑻ 彼は気が弱いので、彼女に反論できなかった。

⑼ 金と時間があれば、旅行に行く。

のようなものである。これも多くの人にとって、読点は自然と打てるものであろう。

以上の８項目の後に続くものは、「助詞を省略したとき」「挿入句･引用の後」「強調する語句の後」「呼びかけ･応答詞の後」「息継ぎをするところ」が挙げられていた。これらは、会話の文言を記録する際に生じやすいものであり、企業で使われる文書には出現しにくいものである。そうしたことが、企業人向けの読点指南サイトであまり取り上げられなかった理由の可能性がある。

3.3　読点指南サイトの認識

以上の結果から、読点指南サイトにおける「読点に対する認識」が垣間見える。

いずれのサイトも、「読点を打つ場所」を網羅して説明しようとしているわけではないようだ。他方、サイトによって、取り上げている項目の違いも小さくない。

多くのサイトで取り上げていた「主語の後」「並列する語句の後」「接続詞の後」「連続する漢字やひらがなの切れ目」といったものは、いかにも「読点を打つ場所」として必要だと説明しやすい項目なのであろう。その意味では、読点指南サイトは、読点を打つルールと銘打っているものの、その実態は、それらしく説明できるものを選択している可能性がある。

また、同種の項目を取り上げるにあたって、サイトによる説明の仕方が少しずつ異なっていた。表現が厳密ではなかったり、用語が明らかに間違っていたり、なかには、事実の認識さえも誤っていたりするものさえあった。ここからは、専門家でない人たちが、専門書ではない、いいかげんな出所のデータを切り貼りして書いているのではないかと疑われる。

4　「読点の打ち方」指導の基礎

読点指南サイトでは、読点の打ち方について、厳密に定義できないことを、まるでルールであるかのように扱っていた。例えば、すべてのサイトで取り上げていた「（長い）主語の後」も、長さを特定できないのに、主語の後には読点を打つのがルールであるかのように述べていた。これでは、読点に悩む人々への助けになるかどう

か疑わしい。

読点に関しては、ルールなどないのである。読点には意義と役割があって、過去の読点の使用者（日本語文を表記してきた人々）が、その意義と役割を果たせるように、読点を使用してきた結果、いくつかの傾向が認められているにすぎない。ルールと呼んでいるものは、傾向にすぎない。傾向は、表記主体の好みや文章の種類によってさまざまに違って現れるのである。

したがって、傾向をルールとして説明するよりも、読点の意義と役割を説明して、特に注意すべき状況、つまり、読点がその機能を十二分に発揮できる状況を指導するほうが賢明なのである。

そこで、以下、読点の意義と基本的な役割のポイントについて述べる。

まず、読点の意義であるが、基本は「区切ること」にある。そして、区切ることには、次の２つの異なった役割を果たす目的がある。

①音声・語の識別

②文・文構造の識別

このうち、①は、音や語など文を構成する要素のかたまりを、読み手に正しく識別してもらうための役割を果たすためのものである。実際には、音声を文字化する場面で生じやすいものである。例を挙げよう。

⑽ 息の切れ目や、読みの間を示す。

〔例〕エイ、エイ、オー。

〔例〕ピピピピ、ピーと笛が鳴る。

⑾ 助詞を省略したことを示す。

〔例〕どう感じたか、書きなさい。

⑿ 紛らわしい、語と語の切れ目を示す。

〔例〕親は死んでいない。

親は死んで、いない。

いずれの読点も、文頭と読点の間、読点と読点の間、読点と文末など、読点で区切られた部分を確定する役割を果たしている。読点指南サイトにあった「連続する漢字やひらがなの切れ目」に打つものも、「漢字やひらがなの切れ目」というより「語と語の切れ目を示す」ために打っているのである。

②は、文を構成する成分が、どのような構造になっているかを示す役割とかかわる。こちらは例を挙げて説明しよう。

⒀ だから私は子供のころイギリスフランスを旅行することにとても強くあこがれた。

読点のない、この文に読点を打てるだけ打ってみると、どうなるか。次のようになるだろう。

⒁ だから、私は、子供のころ、イギリス、フランスを旅行することに、とても強くあこがれた。

ここで、元の文⒀の構造を、図に示してみる。すると、次のようになる。

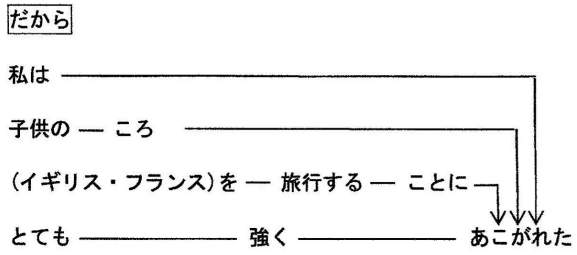

図　文の構造における語句の関係

この図は、文の成分である語句が、お互いにどのような関係にあるかを示している。

まず、□で囲われ、孤立しているもの、図では「だから」だが、これは他と関係なく「独立」していることを表している。次に、直線と矢印のついた曲がった線分は、つないでいる両者が「修飾、被修飾の関係」にあることを示している。図では、例えば「私は」は「あこがれた」を修飾しているし、「子供の」は「ころ」を修飾している。さらに、（　・　）は「並列の関係」にあることを示している。図の場合、「イギリス」と「フランス」が並列の関係にあることを示している。

このとき、読点を打つことができるのは、文⒁によれば、「だから」「私は」「ころ」「イギリス」「ことに」の後である。これらについて見ると、

「だから」は「独立の関係」にある語句

「イギリス」は「並列の関係」にある語句の前者

である。残る「私は」「ころ」「ことに」は、図によれば、いずれも矢印のついた曲がった線分の始まりの箇所に位置している。しかも、曲がった線分のすべての場合に当てはまっている。では、「直線」と「矢印のついた曲がった線分」の違いは何か。どちらも修飾関係を示しているが、「直線」は文の中で連続する位置関係にある場合で、「矢印のついた曲がった線分」は連続しない両者をつないでいる場合である。

つまり、２つの語句が修飾関係にある場合、修飾先が

直後にないときに読点が打てるのである。誤解しないでほしい。「打つ場合」ではなく、「打てる場合」である。逆に言えば、修飾先が直後の場合には、修飾関係にあることを示すためには、読点を打たないのである。

そこで、読点の打てる場合としては、次のようにまとめることができる。

A 独立の関係にある語のとき

B 直後の語と並列の関係にあるとき

C 直後の語ではなく、さらに後の語を修飾するとき

このA～Cの共通点は、その語が直後の語を修飾しないということである。言い換えれば、その語が直後の語を修飾しないことを示す、つまり、区切りを示すこと、「区切ること」が、読点の基本的な性質だということなのである。

上にも述べたように、読点を打つ場所と打てる場所は同じではない。上の文でも、修飾関係に関しては、実際には、「私は」「ころ」のように修飾先が遠い場合には打たれやすく、「ことに」のように修飾先が比較的近い場合には打たれにくい。

ついでながら、A～Cと読点指南サイトで多く挙げられていた項目との関係を述べておく。Aの独立の関係は、「接続詞の後」「重文の途中」に該当し、Bの「並列の関係」は、まさに「並列する語句の後」に該当する。Cは、「主語の後」「修飾先を明確にするためのもの」「接続助詞の後」「条件句の後」の多くの場合に当てはまるだろう。つまり、読点指南サイトのルールを覚えてチェックするよりも、文構造を意識して読点の必要の有無を自らが考える方が有意義で効率的なのである。

読点を打つことの指導では、まず、ここに述べた、読点の意義を認識させることが必要である。そして、読点を打つにあたっては、「何かの後に打つ」という発想が間違っている。情報を伝える観点に立って、語句と文構造が明確になっているかを問う気持ちで行うべきなのである。

参考ウェブサイト

[A] NobyNoby　株式会社 And クリエイト
句点・読点の正しいルール　あなたは大丈夫？
「今までずっと間違っていたかも…」
https://marketer.jp/punctuation.html

[B] 日経 XTECH
句点「。」と読点「、」の決まりを知る
https://xtech.nikkei.com/it/article/COLUMN/20110527/360777/

[C] 文賢マガジン
文章を読みやすくする！読点の使い方 9 つのルール
https://magazine.bun-ken.net/1844

[D] 未知株式会社
句読点にはルールあり！意識するのは特に読点。その使い方や効果とは
https://www.mchs.co.jp/dm_column/ punctuation/

[E] 記事作成代行屋
読点（とうてん）とは？打ち方・使い方 8 つのルール
https://xn--3kq3hlnz13dlw7bzic.jp/comma/

[F] 株式会社 LIG
【読点の打ち方】文章に「、」を打つタイミング 12 パターン
https://liginc.co.jp/285073

[G] ライティングマガジン
【例文あり】読点の基本ルール 6 か条。正しい打ち方を学ぼう！
https://jikobunseki-lab.com/comma-rule/150/

[H] wordrabbit
プロのための文章力ガイド：第 5 回「句読点の正しい使い方とルールを覚えて文章を読みやすくする」
https://wordrabbit.jp/blog/20

[I] 記事スナイパー
【句読点の打ち方】文章が劇的に読みやすくなる正しいルールと使い方
https://kiji-sniper.com/blog/how-to-hit-punctuation/

[J] GetCV 株式会社
句読点の打ち方とルールを例文付きで解説！注意点とポイントを知ろう
https://writer.get-cv.co.jp/how-to-type-punctuation/

参考文献

[1] 樺島忠夫編，文章作法事典，東京堂出版，1979

[2] 佐竹秀雄・佐竹久仁子，ことばの表記の教科書，ベレ出版 2005